2017 年夏期
カナダ語学研修報告書集

English for Global Citizen
English Language Institute, University of British Columbia
2017.8.28 – 9.15/9.22

Monthly English Program
English Language Centre, University of Victoria
2017.9.5 – 9.29

秋田県立大学　国際交流室

－目次－

研修概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

カナダ短期留学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
生物資源科学部 アグリビジネス学科 2年
南　舞帆

カナダ語学研修・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
～自分を知った日々～
生物資源科学部 応用生物科学科 2年
牧　廉斗

なによりも濃い21日間・・・・・・・・・・・・・・・・・10
生物資源科学部 生物環境科学科 2年
佐々木 佳音

バンクーバーで感じたこと、学んだこと ・・・・・・・13
～ブリティッシュコロンビア大学での語学研修を受けて～
生物資源科学研究科　生物資源科学専攻 修士1年
高橋　健史

カナダ語学留学で得たもの ・・・・・・・・・・・・・・19
生物資源科学部 生物環境科学科 3年
鈴木　厚哉

[研修概要]

参加者と研修先／期間

	氏 名	学部・学科	学年	研修先／期間
1	MINAMI Maho 南　舞帆	生物資源科学部 アグリビジネス学科	2	ブリティッシュコロンビア大学 ３週間（8 月 28 日～9 月 15 日）
2	MAKI Rento 牧　廉斗	生物資源科学部 応用生物科学科	2	
3	SASAKI Kana 佐々木 佳音	生物資源科学部 生物環境科学科	2	
4	TAKAHASHI Takeshi 高橋　健史	生物資源科学研究科 生物資源科学専攻	M１	ブリティッシュコロンビア大学 ４週間（8 月 28 日～9 月 22 日）
5	SUZUKI Atsuya 鈴木　厚哉	生物資源科学部 生物環境科学科	3	ビクトリア大学 ４週間（9 月 5 日～9 月 29 日）

滞在方式

ホームステイ

経費

１）個人負担

・プログラム費用：約 24 万円 ～32 万円

※申込金、授業料、ホームステイ代、医療保険料等を含む

・現地交通費、現地食費、アクティビティ代ほか

２）大学からの助成

・国際航空運賃（羽田空港ーバンクーバー空港／ビクトリア空港 往復）

参加者の募集選考

中上級レベルの語学研修プログラムとして、TOEIC／TOEIC IP スコア 500 点以上、TOEIC Bridge 150 点以上、または英検 2 級以上のいずれかを満たしていることを条件に参加者を募集、応募者に対し面接選考を行い決定した。

研修報告会

日時：１２月１日（金）１６：１０～１７：１０

会場：秋田キャンパス図書館　ラーニングコモンズ

カナダ短期留学

生物資源科学部　アグリビジネス学科
2 年　南舞帆

私は 8 月 27 日から 9 月 17 日までの 3 週間カナダのバンクーバーにあるブリティッシュコロンビア大学（UBC）で英語を中心に現地の文化や生活について学んだ。

〇学習内容

私は今回 UBC の ELI（English Language Institute）のプログラムに参加した。まず、事前に行われたリスニングテストと初日に行われたスピーキングテストでレベルに合ったクラスに分けられた。クラスは午前と午後で違う先生、学生というふうに構成されていた。また、ELI の今回のプログラムでは、週ごとにそれぞれテーマが設けられていて、1 週目は多文化主義、2 週目は食べ物、3 週目はテクノロジーであり、バンクーバーの文化を中心に学んだ。

1 週目の午前のクラスでは、バンクーバーで有名な動物や先住民の文化について学んだ。バンクーバーの先住民について学ぶため、MOA（Museum of Anthropology）という大学の敷地内にある博物館に行き、いくつかのグループに分かれそれぞれ担当の展示物について理解し、学んだことについて他のグループの人々に紹介するという授業があった。私のグループは私を含め日本人 3 人、イラン人 1 人のグループで英語のレベルも同じくらいの学生だった。この授業はバンクーバーについて学ぶのに非常に良い授業であったと思う。バンクーバーの様々なところでトーテムポールなどの先住民の文化が見られるため、授業でバンクーバーについて学んでいたので街にある建造物について理解しやすかった。午後のクラスでは、カナダの騎馬警官隊であるマウンティについて学んだ。それはカナダで起こった有名な Mountie in a turban という出来事についてで、シク教徒である Dhillon さんは RCMP（騎馬警官隊）の規則でターバンが禁止されていたためマウンティにはなれないというふうに判断されたというものである。最終的には議論の結果、入隊可能になったが、あの多文化主義のカナダでこんな出来事が起きたということは非常に注目された。このような社会問題についてパネルディスカッションを 6 人 1 グループで行った。私のグループはヒエラルキーについてのディスカッションをしたが、非常に難しい内容で授業についていくのが大変だった。

2 週目は食べ物について学ぶため、午前のクラスでは、UBC 内にある Roots on the roof というクラブ活動にお邪魔し、いろいろな野菜や果物を見た。その後、UBC マーケットという UBC で行われていた市場に行き、アンケート調査を行った。午後の授業では、グランヴィレ・アイランドという場所にある大きな市場で変わった食べ物を探す授業だった。そして、ドラゴンズ・デンという有名なテレビ番組にならって、市場で見つけた変わった食

べ物を使い、新商品を考えだし、それをどう売るか、それにはどういったメリットがあるのかということのプレゼンを行った。

3 週目はテクノロジーについて学ぶため、午前のクラスにヒラリーというパソコンもプロジェクターも一切使わないペンと紙だけで授業を行う先生がきて、話をきいた。そこでは、英語を学ぶのにハイテクノロジーは必要なのか、そうではないのかについてクラスで議論しあった。午後のクラスでは、UBC の学生と日本の学生の SNS 使用についてアンケート調査をし、それをビデオメーカーを使ってまとめて発表した。

ELI の今回のプログラムはバンクーバーもしくはカナダが中心とされていたため、私はもともとカナダについて何も知らなかったが、授業でいろいろ学んだため今は少し詳しくなった気がする。

○現地生活

私は今回ホームステイをした。UBC からステイ先まではバスで約 1 時間、普通よりは遠い方だったが、バンクーバーは交通が発達していたのでそこまで大変ではなかった。私のホストファミリーは中国系で、おじいさん、おばあさん、ホストマザー、その娘が 2 人の 5 人家族で、2 週目まではいとこのサンディーも一緒に暮らしていた。ほかの家に比べたら大家族でとても賑やかな家であった。

また、ルームメイトも私以外に２人いて、１人は同じプログラムの日本人の女の子、もう１人は１週間遅く始まる６か月の英語のプログラムの韓国の女の子で､時々3人ででかけたりした。朝ご飯は自分でパンを焼き、昼ご飯はホストマザーが弁当を作ってくれ、夜ご飯はおじいさん、ホストマザー、15歳の娘が交替で作っていた。すべて中華料理であったが、なかでも、おじいさんの作る料理は格別であった。どの料理もおいしかったし、家には中華料理店で使われている回転式のテーブルがあり、日本ではあまり見ないのでとても新鮮であった。また、3週目のときには、ホストファミリーに普段のお礼のため、お好み焼き、巻き寿司、トッポギを私達ルームメイトで振る舞うパーティーを開いた。どの料理もおいしいと喜んでくれたので別れが悲しかった。洗濯は、基本的に週に１回、自分で行った。洗剤などは貸してもらった。お風呂は基本的にシャワーで留学生用にシャワールームと洗面台、トイレが用意されていた。ホームステイ先はとても私にとって恵まれている家庭で、充実した日々を送れていた。また、私が帰国してからも時々写真が送られてきて、今でも交流が持てているのでまた会いに行きたいと思う。

バンクーバーにいる間、学校での勉強だけでなく観光しにいろいろな観光地を訪れた。UBC の ELI のプログラムにはアクティビティといって通常の値段より安く観光できるプランが設定されていたので、それを利用して観光したり、個人で友達とでかけたりもした。私はいくつかアクティビティに参加したが、フェリーに乗ってヴィクトリアという街に観光しにいったのが一番楽しかった。
100 ドルで今回は行くことができたのだが、普通なら 200 ドル近くかかるので、とても得であった。街並みもきれいで、バンクーバーから日帰りでいけるので、もしまたバンクーバーに行くことがあれば訪れたい。

他にもウィスラーというウィンタースポーツが盛んな街に友達と個人的に行ったのだが、バンクーバーやヴィクトリアとはまた違う雰囲気の街で、ウィンタースポーツが好きな人にはとっておきの場所なのだと感じた。

ほかにもバンクーバーにはたくさんの観光地があって、何度も行きたくなるところばかりであった。また、交通の便が非常に良いので学校帰りにもでかけやすかった。

〇この経験をこれからどう活かしたいか

私はこのカナダ研修に行く前から海外で働く、または海外と関われる農業の仕事に興味があった。今回、カナダに行って、UBC で英語を勉強していると自分よりも高いレベルの英語力を持っている人は大勢いて、まだまだ私が海外で働くには勉強や知識が必要だということがわかった。また、海外の様々な情報や歴史、文化について理解する力も必要で、英語以外にも勉強しなければならないことがたくさんあるということもわかった。今回 UBC では、カナダについての知識を学ぶことを通して日常会話をたくさん勉強し触れる機会も多かった。私はこの経験をこれから会う海外の人との日常会話に生かすことと、ほかの生徒から受けたモチベーションを原動力としこれからの専門的な英語の勉強に取り組んでいきたいと思う。3 週間という短い期間だけでは英語力はそこまで伸びないと思っていたが、日本に帰ってきてからカナダにいるときよりもスムーズに日常会話が英語でできるようになっているように思える。私は今回の研修を自分の将来の夢のスタート地点とし、これからも英語学習に励んでいきたい。

カナダ語学研修
～自分を知った日々～

生物資源科学部　応用生物科学科

２年　牧廉斗

Ⅰ.始まりと今

「朝日が水平線から、光の矢を放ち。」
松田聖子さんが歌った『瑠璃色の地球』の歌詞に、このようなフレーズがある。そして、私の心の中にも、新しい光が差し込んできた。それは今の、そしてこれからの私にとって大きな意味を持つものとなっている。

２０１７年の夏季休暇に、私はカナダ語学研修へ参加した。高校生の時から好きで、一生懸命に勉強していた英語のスキルアップを図るため、というのが当初の目的であった。つまり、「語学研修」の文字通りの意味でこの研修に臨もうとしたのが、そもそもの始まりである。しかし、私には他人よりも大きく劣っている点があった。それは、コミュニケーションの楽しさを知っていなかったということと、チャレンジを恐れていたということだ。普段どんなに勉強や物事への取り組みを頑張っていても、仲間と共に経験や思いを分かち合う機会にはあまり恵まれずにいた。そのため、心は何かを求める姿勢であっても、動き出すことにためらいしか感じられていなかったのである。このように、「参加したい。よし！」と思い立ったものの、どこか前向きになれていない自分が常にいた。

そんなもやもやとした感情の中、でも心のどこかで、自分なら他人よりもはるかに多くのことを吸収できると自信ありげな自分もいて。だが今思えば、こういう期間があったからこそ、自分の成長も大きく感じられているのかもしれない。実際この研修を通して、英語学習はもちろん、私は多くの仲間を得た。そして、豊かなコミュニケーションの機会の中で、他人を知り、自分を知り、夢を知った。今では、自分に劣っている点があるとは少しも思わない。そんな私へと至った過程を、そんな私にしてくれた日々を、皆さんに伝えていきたい。

Ⅱ.初めてのことばかり

ぎこちなくも、挑戦したいという自分の思いを尊重しながら語学研修への準備を進めていたが、何せこういった大きな挑戦も、海外へ行くことも私にとっては初めてのことで、

むしろ現地での日々よりもてんやわんやしていた。心配事の尽きない日々であったが、家族や大学のサポートを受けて、一つ一つこなしていくことができ、事前準備の段階でも学ぶところは多く、また、支えてくださる存在があってこその今回の挑戦であることを日々実感しつつ過ごしていた。「おかげさま」とは、影の存在をたてる素敵な日本の精神だが、今回の経験の中ではそれを強く実感できた。支えてくださる方がいることは当たり前ではない。そんな私の思いが、現地での生活が近づくたびに、挑戦に前向きな私へと変えていってくれたのだろう。出国当日には、カナダでの日々をどうモノにしていくか、わくわくがどうにも止まらなくて、自分が閉じこもってしまっていた狭い世界から抜け出すことに、恐怖も不安もなくなっていた。

Ⅲ.カナダでの日々

到着初日から、様々な人が人種、文化を問わず生活している様子に、いい意味で衝撃を受けた。日本では触れることのできない多文化主義や、英語圏のアクティブな空気に触れて、人生には何通りもの道があり、生き方があることを肌で感じられた。また、バンクーバーという、美しい自然と都市が共存する空間に包まれて日々を過ごせたことは、本当に幸運な事であった。週末の小旅行もとても充実し、心身ともに良好な日々を送れた。

英語しか喋れない、English Only という精神のもと構築された UBC の英語の講義では、常に英語での思考が求められ、座学からプレゼンテーションの作成、発表、課外授業に至るまで必死で英語を使い続けた。最初は不慣れだったり、自信がなかったりで、うまくコミュニケーションが取れないことも多々あり、加えて常に英語から逃れられないために疲労が溜まっていたが、同じ環境を共有する仲間たちと背中を押しあいながら取り組むことで、次第に英語を使うことが自然になっていった。UBC のプログラムでは、競争とは違った意味で、同じ困難を共有する仲間と切磋琢磨する環境が整っており、非常に洗練された教育を受けることができた。周囲の仲間も皆、英語を学ぶために集まって来ており、志も高く、一緒に勉強していて非常に心地が良かった。

英語の学習題材としては、グローバルなトピック、例えば食料やテクノロジーに関することが用意されており、また、世界各国に対する固定観念と実際の様子の比較やカナダの先住民族について触れる人類学の領域も学ぶことができた。英会話の基本的な、しかし、日本では教えられない細かなニュアンスや言い換え表現についても、明快かつ丁寧な指導を受けることができ、教育のリソースは非常に充実していた。本当に３週間しか UBC で、カナダで過ごしていなかったのかと疑うくらいに、英語に対する親しみをより感じることができた。

Ⅳ.私の宝物

UBC のプログラム中に出会った友人は、私の人生の宝物だ。自分とは異なる学問領域、生活、性格、そして夢をもつ彼らとの交流は、そして、仲間と経験を共有できたということは、私にとってかけがえのないタカラモノとなった。

私は他人に夢を尋ねるのが好きだ。なぜなら、夢を語るとき、それは誰も彼もが輝いている瞬間であるからだ。「夢を語りましょう。」と言った高校時代の校長先生の思いも、ここにきてやっと理解できた。夢を語り合うと、自分の道、相手の道、どちらの道も明確に見えてくる。どんなに抽象的なものであっても、語り合うことで形ができてくる。さらに相手の夢を知ることで、相手の持つ知識も経験も、自然と知ることができる。それらは物事をとらえる新たな視点となり、自分の興味の幅も大きく広がっていく。だから、私は夢を語り合うのが好きなのだ。つまり、彼らひとりひとりが、私が私という人間を、そして世界の広さを知るきっかけとなった存在なのである。

今回の経験の中で私が一番に伝えたいことが、「仲間の大切さ」である。たくさんの仲間との出会いが、英語学習にとどまらない学びを、生きる意味を私に教えてくれた。
“I am sincerely grateful to all the people for every encounter.”
これからも、彼らと互いの背中を押しあいながら、切磋琢磨していきたい。

Ⅴ.今の私、将来の私

私が今回の経験を経て知った自分は、笑顔と人の良い点を重んじる人間であった。決して自惚れではなく、これは、大切な仲間と過ごした日々が私に気づかせてくれたことだ。また、英語を使うということが自分の中では当たり前になりつつあることが何よりうれしい。当初の目的も、現地で得たことも、今の私の一部となっている。

ちなみに私の夢は、バイオテクノロジーを介して世界中を笑顔にすることである。何とも子供っぽく思われる夢だが、心の底から笑顔になっている時、そこには、寂しさも残虐さも無い。そして何より、誰もが幸せになれる、誰もができる、最も身近で大切なことだ。私は笑顔の力を信じている。自信を持ってこう言えるのも、今回、さまざまな人々とふれあって、世界を、自分を知ることができたからだ。

英語というグローバル時代の共通語を携え、世界の一員として少しでも多くの人を笑顔にできる、今回の短期留学はそんな人間を目指すきっかけとなった。様々な方々への感謝を忘れず、この経験で得たことを心に刻み込んで、人生を歩んでいきたい。

留学の記録（写真）

Figure 1　English Language Institute での昼食

クラシック音楽やミュージカル、歌劇の話からアニメの話まで、楽しくお話ししました。

ところで、ENGLISH ONLY ZONE と書かれたボードが見えますでしょうか。英語で伝えるのは難しかったですが、好きな事に関する話になると、何とか伝えようと頭が働くもので…(笑)　みんな必死にしゃべっていました。とても楽しいひと時でした。

Figure 3　ホストファミリーとのお食事

週末はホストマザーのカレンさんとその息子さんのジョーティさんとお食事していました。この日はミートソースですね。ジョーティさんは日本で働いていたことがあり、日本に興味津々でした。モノレールは未来を感じるよね！と熱く語っていました。ちなみにカレンさんは日本の自動販売機の数の多さと安さに驚いたそうです。I love Japanese vending machine. とか言ってましたね。

Figure 2　一番のベストフレンド Nozo との会話の様子

パシフィックスピリットパークでの１枚です。美しい自然に囲まれて、それぞれの熱い情熱を語り合いました。彼との出会いは、とても大切なものとなりました。今でも連絡を取り合って、互いの背中を押しあっています。

Figure 4　冬季オリンピックの競技開催地となった
ウィスラーにて

オリンピックの表彰台です。ここに立てば、まさに気分は金メダリスト！！！

ウィスラーはウィンタースポーツで有名なところですが、マウンテンバイクのライダーに人気のスポットでもあります。

なによりも濃い 21 日間

生物資源科学部　生物環境科学科
2 年　佐々木 佳音

向こうでの生活、日本との違い

今回のカナダ留学で、私はホームステイをさせていただきました。この留学は私にとって二度目の海外留学でしたが、以前の留学ではコンドミニアムで日本人の学生と生活をしていたため、ホームステイという経験は私にとって初めてでした。また、ステイ先の家族構成の名簿を受け取った時、メンバーにあったのは「一人暮らしのおばあさん、趣味は音楽鑑賞、庭いじり、ズンバダンス、etc…」という情報で、どのようなホームステイになるのか想像がつきませんでした。実際にステイ先についてみると、チャイニーズ系のホストマザーが明るく迎えてくれました。そして日本人の学生がもう一人いて、計 3 人での 3 週間の共同生活が始まりました。バンクーバーでは、シャワーは 10 分で済ませる、洗濯は週に 1 回まとめて行うなどが当たり前で、水資源が豊富な日本では考えにくいルールがありました。また、朝ごはんはシリアルまたはトーストのみ、時間を過ぎても待ってくれるバス、ぬるいのが当たり前の飲用水など、今まで経験したことのない生活様式を体験しました。はじめの週こそ戸惑ったものの、帰るころにはすっかりバンクーバー式の生活にも慣れました。今でも気に入った一部のバンクーバー式生活スタイルは続けています。

また、バンクーバーは移民に前向きで、とても他国籍な街でした。週末に出かける機会も多かったのですが、出先でもたくさんの言語が聞こえてきました。様々な人が、様々な言語を用いて生活していて、しかしまとまっていて…うまく言えませんが、単一民族が主流の日本にはないような活気を感じました。

クラスの様子、学生の様子

留学プログラムでは、UBC の中にある ELI(English Language Institute)という建物でほとんどの授業を受けました。この建物内では、英語以外で話してはいけないというルールがあり、日本、中国、ドイツなど、様々な国の学生が英語でコミュニケーションをとっていました。

授業はモーニングクラスとアフタヌーンクラスの二部構成で、モーニングクラスでは英語のレベルが同じくらいの学生と一緒に、基礎的な表現やカナダにまつわる歴史や文化、それを学ぶ上で必要なボキャブラリーなどを学びました。アフタヌーンクラスでは、自分よりも英語のレベルが高い学生たちと一緒に PowerPoint を用いてプレゼンをしたり、5 分ほど無理やりにでも相手と会話を紡ぐ練習をしたりしました。モーニングクラスは楽しみながらこなせたのですが、大変だったのがアフタヌーンクラスでした。最初の週は先生の出す指示がわからず、ほかの学生に聞いてやっと理解できるという状態でした。また、プ

レゼンの話し合いの際に、英語を学んでいる段階の学生たちなので、お互いに思ったことをうまく英語で表現できずにもどかしい思いをしたりしました。国籍は違っても、母国語が英語ではないという共通点がある学生たちの中で、自分はこんなにも英語ができなかったのかと、劣等感に苛まれることもありました。

クラスメイトも本当にさまざまで、小学校のころから夏休み毎に短期留学に行くという日本人学生、日本の大学院で勉強中で、さらに英語を学ぶためにこのプログラムに参加した中国人学生、子育てをしながらも英語を学ぶイラン人の女性、ケベック州から英語を話せるようになるために参加したカナダ人のおじいさんなど、様々な方が参加していました。そして、このような方々と共に学べたことが、私にとって非常に良い刺激となりました。

留学を終えて

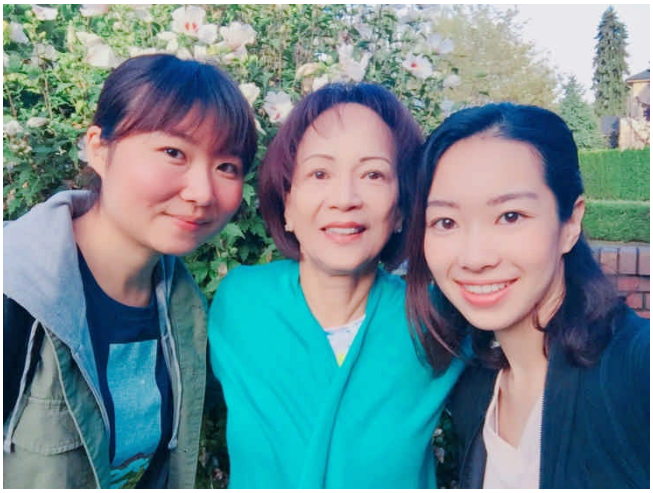
留学から戻ってから、日常生活のなかで英語を使う機会が増えたと感じています。一緒にカナダへ行ったメンバーとの簡単な SNS のやり取りは英文でおこなうようになり、今までは敬遠していた英語で書かれた文献も、臆さず手に取るようになりました。そして先日は、タイからの留学生を英語でサポートするプログラムに参加しました。タイの留学生とも積極的に会話ができ、アフタヌーンクラスの経験が身になって英語で話す度胸が身についたように感じます。これには UBC へ一緒に行ったメンバーも参加しており、彼らとともに帰国後の英語力の変化を実感することができました。またこのサポートを介して、英語や国際交流に興味があるという学生とも知り合う機会を得ました。

私はこの留学を通して、英語を学ぶ環境とそれを共に学ぶ同志がいれば、どこでも本格的に英語を学ぶことは可能かもしれないと感じました。現在のこの大学は理系がメインということもあり、英語に対して苦手意識を持つ学生が多いように感じます。そんな中にも、英語が得意になりたい、国際的なことに興味があるという学生も少数ながらいます。そのような学生に呼び掛けて、この大学で学生が主体となって英語を学ぶ楽しさを伝えられるような活動をしていきたいと思いました。

最後になりますが、この留学でお世話になったすべての方々に、いままで私に英語の面白さを教えてくださった先生方に、心より感謝申し上げます。今後とも精進してまいります！

with my classmate

Laurie's class!!



with my host mother & roommate

Capilano

Lunch at Whistler

バンクーバーで感じたこと、学んだこと
～ブリティッシュコロンビア大学での語学研修を受けて～

生物資源科学研究科　生物資源科学専攻
修士１年　高橋健史

はじめに

2017 年 8 月 27 日、私達は日本を旅立ちバンクーバーへと向かった。バンクーバー屈指の大学「ブリティッシュコロンビア大学（以下 UBC）」が提供する English for Global Citizen プログラム(以下 EGC)に参加するためである。このプログラムでは、UBC にある英語教育施設 English　Language Institute(以下 ELI)で英語の授業を受けたり UBC 学内やバンクーバー市内を行きかう人々と交流したりすることで、生きた英語の力を身に付けることを狙いとしている。私はこの EGC プログラムを 4 週間受けたので、ほぼ 1 ヶ月バンクーバーに滞在していたことになる。このレポートでは、1 ヶ月のバンクーバー生活において感じたこと、考えたことを紹介する。

これから自分が英語とどう向き合うべきか

そもそも私が今回 EGC に参加した目的は以下の３つであった。

①英語力の向上
②自然豊かなバンクーバーの観光
③UBC の学生寮「ブラックコモンズ」の見学

この章では①のみに触れることにして、②、③に関しては写真とともに後述する。

私は大学入学当初から英語を話せるようになりたいと夢見ていたが、あまり行動に移せてはいなかった。だから、あえて日本語が通じない環境に身を置くことで、少しは英語が話せるようになるのではないかと考えたことが EGC に参加したきっかけである。1 ヶ月でペラペラになれるわけがないことは承知の上だが、「何か少しでも得るものがあれば」と藁にも縋る思いで参加した。

EGC は事前のリスニングテストと EGC 初日のスピーキングテストでレベル別にクラス分けされた。私のクラスメートにはイランの女性、ケベック州（カナダの東部でフランス語が主流）の女性、韓国の女性が 1 人ずついた。だから、彼女らとのコミュニケーション方法は英語しかない。アクセントや訛りが日本人とは異なる人達と会話の練習をすることが出来たのは大変有意義であった。

EGC で残念だった点が 1 つだけある。それは EGC 参加者が日本人だらけであり、日本語でしか会話をしない日本人が自分の周りにたくさんいたことである。EGC では、英語力を少しでも向上させる為に授業中は英語しか使ってはいけないというルールが存在している。通常の授業では先生が眼を光らせているので日本語で会話をする日本人はいない。し

かし、教室の外に出て学内・学外で調査をする時間（インタビュー）は直接先生が見ていないので、どうしても日本語が飛び交ってしまう。EGC は生きた英語力を身に付けさせるためによくインタビューを設けさせていたが、それで日本語が飛び交ってしまっては本末転倒ではないだろうか。私は何のためにはるばるカナダに来たのだろうと始めの数日間はひどく悩んだ。しかし、たくさんのお金と時間を費やして EGC に参加したのに何も得られないというのは笑えない。だから私は毎時間授業に関する質問をしたり、アクティビティ（EGC が主催する観光や文化を楽しむ時間）の時間に私達のボランティアをしてくれる UBC の学生と積極的に会話したりするなど、英語で会話できる機会を必死に求めた。この意地でも外国の人と話そうとしたことは、今ではいい経験であったと考えている。

結局のところ、私が 1 ヶ月でどれくらい英語力が向上したのかは定かではない。もしかしたらあまり向上していない可能性もある。ただし上で述べたように、必死に外国人と話そうと努力したことで、コミュニケーション能力は大きく向上した自信がある。また、研修当初はレストランなどで店員の話していることが全く分からなかったが、研修後半ではレストランの店員と雑談も交わせるようになった。研修終盤で訪れたワインショップでは、店長とお酒の話やお互いの出身地の話を楽しく交わしたことは今でも脳裏に焼き付いている。これは英語力が上達したというよりは、外国人の思考回路や価値観を自分が理解し始めたから、会話が少しずつ成り立つようになったのだと私は推測している。私は、バンクーバーに滞在している間、相手が英語を話している時に、「この人は何を伝えたいのだろう」と考えながら話を聞いていた。その結果、少しずつ外国人の思考回路や価値観を理解し始めることが出来たのだろう。これは、英語に限らす日本語でも同様ではないだろうか。私はこれから日本語で相手と会話する時も、「この人は私に何を伝えたいのだろうか」と考えながら会話を楽しみたい。

EGC4 週間目で、英語がペラペラな日本人と同じクラスになった。EGC 最終日に思い切って「君はどうしてそんなに英語ができるのか」と尋ねてみたところ、「特別なことは何もしていない、大学入試のために英語の受験を頑張って、今は講義の英語をがんばっているだけだ。」という答えが返ってきた。私はこの回答に大きな衝撃を受けた。英語がペラペラな人は何年も外国に行っていたり、英会話教室などに通っていたりするなど何かしら特別な事をしているものだと私は思い込んでいた。しかし、受験や講義の勉強だけでも英語は話せるようになることを彼は私に証明した。つまり、英語の勉強は日本でも十分できるということである。正直なところ私は日本の英語教育を見下していた部分があった。日本の英語教育はだめだ、文法なんか必要ないなどマスコミのメッセージを素直に受け止めて、中学高校そして大学学部時代は英語をろくに勉強してこなかった。英語を話せるようなりたければ、まずは日本で学べるところをマスターしなければならない。これが「今後どのように英語と向き合うべきか」という問いの自分の中で納得した答えである。

印象的な観光スポット・見学場所

②自然豊かなバンクーバーの観光

下の写真はウィスラーの頂上から撮影したものである。ウィスラーは、バンクーバー都心部からバスでおよそ 2 時間ほど北上したところに位置する有名観光スポットである。もともとはスキーリゾートスポットであったが、近年は季節を問わず観光客でにぎわっているらしい。頂上はとても寒かったが、山、森、湖、岩、そして青空とあらゆる自然を一度に堪能できる絶景であった。

右の写真はスタンリーパークに行った時に見つけた巨木である。私はこのような大きな樹木を生で見たことが無かったので大きな感銘を受けた。

③UBC の学生寮「ブラックコモンズ」の見学

下の写真はＵＢＣの学生寮「ブラックコモンズ」の全体像である。この寮は 18 階建ての木造建築物である。日本ではここまで高さのある木造建築物を見ることはできないので、生で見ることができて本当に良かったと思っている。

その他写真・まとめ

帰国直前に偶然遭遇したＥＧＣメンバーと記念撮影

ＥＧＣ最終日に仲良し五人組で記念撮影

今回の研修では、英語に関することはもちろん、世界の環境や文化、価値観の違いなど大変学ぶことが多い１ヵ月を過ごすことができたと思う。また、一生仲良くするかもしれない友人ができたことも今回のプログラムに参加して本当に良かったことである。楽しいことや大変だったことも含めて今回のカナダ研修は大変有意義なものであった。もし、カナダ研修を考えている後輩がいるのであれば、自分は何を学びにカナダへ行くのかをよく考えてから応募することをお勧めする。私は現在修士１年であるので、今後自分の研究の話を英語でも説明できるように、英語・研究ともに精進していきたいと思う。

カナダ語学留学で得たもの

生物資源科学部　生物環境科学科
3 年　鈴木厚哉

私は、4 週間のカナダ夏季語学留学での経験は、私にとってかけがえのないものになったと確信している。初めに、このプログラムに関わってくださった方々、そして現地で支えてくれた全ての人に感謝したいと思う。

そもそもなぜ私が短期留学のプログラムに参加したかというと、自分の英語の力をもっと高めたいと思うようになったからである。きっかけは昨年参加したグアム語学留学だ。2 週間という非常に短い期間であったが、中学校から培ってきた英語が自分の口からほとんど出すことができない、英語が話せない、と実感するには十分すぎる時間だった。さらにグアムでは観光業に力を入れているため、日本語が堪能な人が数多くいた。そのため英語を勉強しに行っているのにもかかわらず、英語から逃げてしまうという生活を送ってしまった。この経験から、自分にはもっと厳しい環境が必要だと考えた。そこで今回のプログラムに応募したのである。

私はカナダのビクトリアで 1 ヶ月生活をしたが、そこでの生活はすべてが新鮮で刺激的なものだった。カナダでの生活を、学校での生活・ホームステイ先での生活・週末のアクティビティの 3 つに分けて報告したいと思う。

最初に、大学での生活について。私が 1 ヶ月お世話になったビクトリア大学では、プログラム初日にテストを行い、点数に応じて 5、10、20、30、40 のクラス(数字が大きいほどレベルが高くなる)に分けられた。私は 20 のクラスだったが、20 のクラスの中でもそれぞれの苦手に合わせてクラス分けが行われた。恐らく私のクラスはリスニングとスピーキングをメインに勉強するクラスだったと思う。授業は午前･午後それぞれ 2 時間半ずつ行われ、そのほとんどがクラスメイトとのディスカッションだった。クラスには、韓国・サウジアラビアの生徒もおり、当然英語を使わなければ会話ができない。私にとって大変うれしい環境であった。ディスカッションの内容も様々で、授業の内容に関するものから、週末何をしたかなどの他愛もない話まで、とにかく楽しみながら英語で会話をすることができた。またクラスでは、午前午後の両方で英語によるプレゼンテーションが課された。内容は自分のお気に入りの場所などを説明するという簡単な内容だったが、人前に立ち英語で説明するという機会はあまり経験の無いものだったので緊張した。しかし、プレゼンテーションをしたことによって、クラスの友達に自分を詳しく知ってもらうことができたので良かった。

日本で勉強してきた英語と現地で学ぶ英語はだいぶ異なるなと感じた。なんといっても現地での授業は説明も会話も英語であること、これが大きな差を生むのではないかと私は感じた。紙に書かれた英語や黒板に英語を書いていくことは確かに重要なことの 1 つかも

しれないが、英語を頭で考えて口でアウトプットするという習慣は、なによりも英語力を向上させると思う。このことを学べて良かった。

次にホームステイ先での生活について。今回が私にとって初めてのホームステイだった。ホームステイ先には、ホストマザーとホストファザーの 2 人がいて、小学校で教師をしている娘さんがたまに帰ってきた。ホストファミリーの皆さんはとても明るく、そして親切に接してくれた。初めてのホームステイで緊張していたが、最後まで楽しく生活することができた。一番印象に残っているのは、ホストファミリーとの夕食だ。私のホストファミリーはとにかくアクティブで、スポーツが好きな家族だった。そのため、夕食ではいつもスポーツの試合がテレビで流れていた。私も小学校から野球をしていてアウトドア派だったので、すぐにファミリーと打ち解けることができた。また、テレビで言われている内容で難しいものや、スポーツのルールなどをわかりやすく説明してくれたので、とてもいい勉強にもなった。学校から出されるホームワークも積極的に協力してくれた。とにかく、優しく接してくれたことと、いろいろなことを積極的に教えてくれたことがうれしかった。ホームステイ先には私がそこに来てから一週間後に中国の留学生がやってきた。彼はとてもフレンドリーですぐに仲良くなった。夕食のときはお互いの国のことについて話したり、放送されているテレビ番組を一緒に見たりした。

はじめてのホームステイだったが、ファミリーや近所に住んでいる方々は親切で優しかった。現地で感じたことは、ホストファミリーに限らずフレンドリーだったことだ。お互いが助け合って生活しているのだという雰囲気が伝わってきた。過ごしやすい場所だなと感じた。また、家の周りは野生のリスやウサギなどがいて自然豊かだった。こうした落ち着くことができる環境のおかげもあって私は一か月の間楽しく生活することができたと思う。

週末のアクティビティについて。私が参加したプログラムは、平日の月曜日から木曜日までが通常の授業で、金曜日には全員参加の無料アクティビティ、土曜日曜は有料のアクティビティとなっていた。私は無料のアクティビティに加え、4 つの有料アクティビティに参加した。アクティビティの中にはホエールウォッチングや美術館鑑賞、学内でスポーツなど様々なものがあったが、私のお気に入りはカヤック体験だ。カヤックをするのはおそらくはじめてだったが、コツをつかむことができたので楽しくカヤックをすることができた。さらに、カヤックをしながらビクトリアの街並みや自然を見ることができたのでとても良い体験をさせてもらったと思う。私は体を動かすことが好きなので、週末にこうしたアクティビティに参加できるのはとても良いなと感じた。英語も勉強したいが、遊びもしたいという人にはオススメのプログラムだと思う。

1 か月という長いようで短い語学留学だったが、私は何よりも「自分の周りにいる人」が最も大切であることを学んだ。今回カナダ語学留学に参加した秋田県立大学の学生は私を含めて 5 人だったが、他の 4 人はブリティッシュコロンビア大学の留学プログラムだったため、実質私一人での留学となった。はじめ何人かの友達と仲良くなったものの、放課後

になると、それぞれが同じ学校同士で集まって遊びに行った。そのとき私は、こんな生活がずっと続いてしまうのかなと不安になってしまった。しかし、そんな私に話しかけてくれたのが同じクラスのドニーという韓国の大学生だった。彼は私に放課後一緒にダウンタウンに行かないかと誘ってくれた。本当にうれしかったし、この日を境に私は積極的にいろんな人に話しかけるようになり、友達の輪が広がった。最終日には日本人を含め、多くの国の人たちと友達になり、かけがえのない体験をすることができた。ドニーを含め、現地で仲良くなった人たちとは帰国してからも連絡を取っている。留学は英語を学ぶだけでなくこうした素晴らしい出会いを与えてくれる。グアム語学留学でもそうだったが、留学を通じて以前の自分よりも数段レベルアップすることができた。現地で関わってくれた人、支えてくれた人に心から感謝したい。

私は現在、今まで学んできた英語を活かせるような職に就きたいと考えている。帰国後すぐに TOEIC の試験を受けた。留学を通じて英語をもっと勉強したい、できるようになりたいという思いが強くなった。今後も英語を使って仕事ができるようになるために勉強を続けていきたいと思う。

クラスメイトとの写真

カヤック体験

先生との記念写真

カヤックからの景色

修了式での写真

2017 年夏期
カナダ語学研修報告書集
編集・発行
秋田県立大学　国際交流室
2017 年 11 月